

〈日本語教育学とは何か2〉

## 文法と日本語教育——「ても」をめぐる——

井 上 優

### 1. はじめに

宮崎 (2014) は、逆接仮定条件の「ても」に対する台湾人日本語学習者の意識について調査した研究である。冒頭で (1) の文をあげ、「学習者は (略) なぜ日本人は『たら』ではなく『ても』を使っているのか疑問に感じるようである」と述べている。

(1) A : あの旅館は、急に行っても泊まれないらしいですよ。

B : つまり、予約しなければならぬということですね。

(1) は「急に行ったら泊まれない」とも言えるが、日本語母語話者としてはやはり「ても」を使いたくなる。

宮崎 (2014) の調査は、学習者に接続表現を用いた文を示し、接続表現が適切でないと思われる場合は適切な表現に修正させるというものである。(2) も調査文の一つだが、同じ調査をおこなった日本語話者 (15名) が全員「と」を「ても」に修正したのに対し、学習者 (100名) で「ても」に修正したのは7%に留まったことが報告されている。

(2) A : 残さないで、たくさん食べてね。

B : こんなにたくさん並べると食べきれないよ。 (宮崎 2014)

このように、「ても」に関する感覚は母語話者と学習者とで異なる。以下では、この感覚のずれの背景について考える。

### 2. 「ても」に対する学習者の疑問の背景

まず、「ても」に関する学習者の感覚を理解するために、次の2つの文を比べよう。

(3) a. こんなにたくさん料理を出されても食べきれない。

b. 量を半分に減らしてもも食べきれない。

これらの文は、いずれも「結果が期待と異なる」ことを表す。

(4) a. こんなにたくさん料理を出された場合に食べられる (期待) かというと、  
こんなにたくさん料理を出されても 食べきれない (結果≠期待)。

b. 量を半分に減らした場合に食べられる (期待) かというと、  
量を半分に減らしてもも 食べきれない (結果≠期待)。

しかし、(3a) と (3b) では「結果が期待と異なる」ということの述べ方が異なる。

(3b) は「条件が変わった場合も結果が同じ」ということを述べており、「ても」を「場合でも」に置き換えられる。このような「ても」を「ても<sub>1</sub>」とする。

- (5) 量を減らさない場合 (条件<sub>1</sub>) は食べきれない (結果<sub>1</sub>) が、量を半分に減らした場合 (条件<sub>2</sub>) に食べられる (期待≠結果<sub>1</sub>) かというと、
- 量を半分に減らしても<sub>1</sub> (やはり) 食べきれない (結果<sub>2</sub>=結果<sub>1</sub>)。
  - 量を半分に減らした場合でも (やはり) 食べきれない (結果<sub>2</sub>=結果<sub>1</sub>)。

この場合、話し手は、「量を減らさない場合は食べきれないが、半分に減らした場合は結果が異なる (食べられる)」という「もっともな期待」がなされている文脈で、「そのように条件が変わった場合も結果は同じ (もっともな期待は成立しない)」ということ述べている。「結果は同じ」と言っているので、「場合でも」が使える。

一方、(3a) は「条件が変わった場合は結果が異なる」ということを述べている。「ても」は「たら」に置き換えられるが、「場合でも」には置き換えられない。このような「ても」を「ても<sub>2</sub>」とする。(「#」は当該文脈での使用が不適切なことを表す。)

- (6) 料理が少ない場合 (条件<sub>1</sub>) は食べられる (結果<sub>1</sub>) が、こんなにたくさん料理を出された場合 (条件<sub>2</sub>) に食べられる (期待=結果<sub>1</sub>) かというと、
- こんなにたくさん料理を出されても<sub>2</sub> 食べきれない (結果<sub>2</sub>≠結果<sub>1</sub>)。
  - こんなにたくさん料理を出されたら食べきれない (結果<sub>2</sub>≠結果<sub>1</sub>)。
  - #こんなにたくさん料理を出された場合でも食べきれない。

この場合、「料理が少ない場合は食べられるが、こんなにたくさん出した場合も結果は同じ (食べられる)」という「過大な (もっともとは言えない) 期待」がなされている文脈で、「そのように条件が変わった場合は結果が異なる (過大な期待は成立しない)」ということが述べられている。「結果が異なる」ことを述べているので、「場合でも」は使えない。しかし、「ても<sub>2</sub>」は使える。

冒頭の (1) も「ても<sub>2</sub>」の例である。「予約して行けば泊まれるが、急に行った場合も結果は同じ (泊まれる)」という過大な期待に対して、「そのように条件が変わった場合は結果が異なる (泊まれない)」ということ述べているので、「場合でも」は使えない。

- (7) あの旅館は、予約して行った場合 (条件<sub>1</sub>) には泊まれる (結果<sub>1</sub>) が、急に行った場合 (条件<sub>2</sub>) に泊まれる (期待=結果<sub>1</sub>) かというと、
- あの旅館は急に行っても<sub>2</sub> 泊まれない らしいですよ (結果<sub>2</sub>≠結果<sub>1</sub>)。
  - あの旅館は急に行ったら泊まれない らしいですよ (結果<sub>2</sub>≠結果<sub>1</sub>)。
  - #あの旅館は急に行った場合でも泊まれない らしいですよ。

「場合でも」が使えないのに「ても」が使えるこのようなケースがあることが、「ても」に対する学習者の疑問の背景にあることがらである。

「ても」に対する学習者の疑問には、中国語の逆接仮定条件の表現「也 yě」(も) が、「ても<sub>1</sub>」「場合でも」に対応する表現であり、「ても<sub>2</sub>」の用法を持たないことも関係してい

る(陳2013、蓮沼2017も同様の指摘をしている)。「\*」は不自然なことを表す。

- (8) a. こんなにたくさん料理を出されても<sub>2</sub>食べきれない。  
 b. 上 这么多菜, 我 (\*也) 吃不了。  
 出すこんなに 多い料理 私 も 食べきれない  
 (一度にこんなにたくさん料理を出した場合は食べきれない。)
- (9) a. 量を半分に減らしても<sub>1</sub>(減らした場合でも) 食べきれない。  
 b. 減 一半儿, 我也 吃不了。  
 減らす 半分 私 も 食べきれない

学習者は、「ても=也」と教わるので、「也」が使えないのに「ても」が使えることを不思議に思うのも無理もない。

### 3. 「ても」に対する母語話者と学習者の感覚のずれの背景

「ても<sub>1</sub>」と「ても<sub>2</sub>」は、「場合でも」に置き換えられるか否かが異なるが、母語話者には両者は同じという感覚がある。次の3つの文を比べても、「ても」と「たら」との違いは感じられるが、「ても<sub>1</sub>」と「ても<sub>2</sub>」の意味の違いはあまり感じられない。

- (10) a. 量を半分に減らしても<sub>1</sub>食べきれない。  
 b. こんなにたくさん料理を出されても<sub>2</sub>食べきれない。  
 c. こんなにたくさん料理を出されたら食べきれない。

「ても<sub>2</sub>」を用いた(10b)は、「こんなにたくさん料理を出した場合に食べきれると期待してくれてもよい(気持ちはありがたい)が、食べる側の理由により、結果が期待についていけない」ということを述べている。食べきれないのは食べる側の事情である。

一方、「たら」を用いた(10c)は、「こんなにたくさん料理を出した場合、それが理由で、期待とは逆の結果になる」ということを述べている。食べきれないのはたくさん料理を出す相手のせいということになる(宮崎(2014)の調査で、母語話者が(2)の「と」を「ても」に修正したのも、これと同じ理由による)。中国語の(8b)は「このように多い場合は食べきれない」というだけで、「食べきれないのは相手のせい」という含みはない。

「ても<sub>2</sub>」と「たら」で「食べきれない」理由が異なることは、「それとは別の理由により」「それが理由で」との共起からも確認できる。

- (11) a. こんなにたくさん料理を出されても<sub>2</sub>(それとは別の理由により/\*それが理由で) 食べきれない。  
 b. こんなにたくさん料理を出されたら(\*それとは別の理由により/それが理由で) 食べきれない。

冒頭の(1)も、「急に行っても<sub>2</sub>泊まれならしい」と言えば、「予約せずに行ってもよいが、常に予約でいっぱいなどの旅館側の事情で、結果が期待についていけない」ということになる。一方、「急に行ったら泊まれならしい」と言うのと、「予約なしに急に行く」ことが泊まれな直接の理由になる。「ても」を使いたくなるのも、「たら」を用

( 8 )

いと「予約なしというだけで宿泊を断られる」という含みが生ずるからである。

結果をもたらす理由という観点から言えば、「ても<sub>1</sub>」「場合でも」は、「ても<sub>2</sub>」と同様、前件の内容は後件の内容をもたらす理由ではない。

(12) a. 量を半分に減らしても<sub>1</sub> (それとは別の理由により / \*それが理由で) (やはり) 食べきれない。

b. 量を半分に減らした場合でも (それとは別の理由により / \*それが理由で) (やはり) 食べきれない。

母語話者が「ても<sub>1</sub>」と「ても<sub>2</sub>」を同じと感じるのも、「ても」が「前件で示される条件は後件で示される結果に関係しない」ことを表すからである。「ても<sub>1</sub>」「ても<sub>2</sub>」「場合でも」「たら」および中国語の“也”の関係を整理すると次のようになる。

(13)

Pても <sub>1</sub> Q P場合でもQ P也Q	条件がPの場合も結果は同じQだ。「結果が異なる」という <u>もっともな期待は成立しない</u> 。	条件Pとは別の理由でQとなる。(条件PはQとは無関係。)
Pても <sub>2</sub> Q	条件がPの場合は結果がQに変わる。「結果は同じ」という <u>過大な期待は成立しない</u> 。	
PたらQ		条件Pが理由でQとなる。

学習者が逆接仮定条件としてイメージするのは、「もっともな期待なのに、それが成立しない」ということである。そのため、「過大な(もっともとは言えない)期待が成立しない」ことを述べる場合には、学習者は順接仮定条件の「たら」を使いたくなる。学習者に対しては、たとえば、次のような説明が必要である。

(14) 「…してもよいが、それでは期待するような結果にならない」ということを言いたい場合は、「…ても」を使う。「たら」を使うと「…してはいけない」ということになる。

### 参考文献

陳昭心 (2013) 「テモの不使用についての一考察—中国語の母語干渉の観点から—」『日本語／日本語教育研究』4, 231-248、ココ出版。

蓮沼昭子 (2017) 「順接と逆接の境界—日本語学習者は逆接条件「テモ」になぜ順接条件形式を使用するのか—」『習ったはずなのに使えない文法』、119-146、くろしお出版。

宮崎聡子 (2014) 「日本語学習者による「ても」の理解に関する一考察—中国語母語話者への質問紙調査をもとに—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37, 113-127

(いのうえ まさる、本学教授)